平成３年度厚生省心身障害研究
「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」

小児科クリニックの診療・相談過程における父親の役割に関する研究(その３)：子どもの心理的発達を援助する父親の機能とそれを支える条件について

吉田　弘道　，井口　由子　，上別府圭子　，巷野　悟郎

要約

本研究は、小児科クリニックの診療・相談過程に父親が参加することの意義および参加の役割を検討することを目的としている。これまでの２年間の研究では、診療・相談に父親が参加しやすい条件を診療側が整えることにより父親参加の頻度が高まること[(1)(2)]、診療・相談に継続的に通ってきている発達障害児や情緒障害児の父親のうち約３分の２は積極的に子どもにかかわり、母親の良き理解者や協力者として助け合って子育てに参加していること、診療・相談に父親も参加することにより子どもの発達に有益な展望が開けることを報告した[(2)]。しかし、これら積極的に子育ての役割を担っている父親がいる一方で、適切な役割を果たせないでいる父親の存在も認められた。また、このように、子育てにおいて役割を果たせない父親の背景には、現在までの夫婦関係や子育ての歴史が関与していることも示された[(2)]。そこで、今回は、父親が家庭の中で子どもの発達において担っている機能は何か、この機能が果たせる条件は何か、そして、相談の過程の中ではどのような心づもりで援助したらいいのかを、心理相談の事例研究を深めることにより探ってみることにした。

重要語句：診療・相談過程、発達障害児、情緒障害児、父親の役割、機能する条件、

Ⅰ．方法

前述した目的のもとに、相談事例の中から二つの事例を選択し検討した。事例１は、家庭の中での父親機能が回復することにより子どもの問題行動が比較的短期間の内に改善された例である。事例２は、父親機能が機能しない家族関係であるため、問題行動が改善されないまま続ている例である。

１．事例１

（１）概要

［主訴］

学校で、担任やクラスメートに対し言動が乱暴であり、常にクラスの中でのトラブルが絶え

こどもの城小児保健部

ない小学５年の男子。家の中でも、妹をいじめ、また親の話を素直に聞かず、母親をいつもいらいらさせている。　現問題行動は、幼稚園の年長組の頃からみられている。

［家族］

本人と４０代前半の両親、そして４歳年下の妹の４人家族である。母親は、子どもの問題になんとか対処し、問題を解決してやりたいと思っているが、子どもの態度に腹の立つことが多く、また、子どものことがよくわからないと悩んでいる。父親は、ワンマンであり、厳しかった自分の父親のやりかたで子どもに接しようとしている。

（２）生育歴

［周産期］

特に異常なし。お産が大変であったという。

［乳児期］

寝ない子で、泣いてばかりいて、とても育てにくい子であったという。母親は、一日中一人で子どもの相手をしなければならず、不安と疲れで、楽しく子どもに接した思い出は何もない。子どもも、一応人見知りや後追いはしたが、母親に甘えてくることはなく、今になって甘えてくる。父親は、男の子であることを喜び、時間のある時にはよく相手をして遊び子どもと一緒に楽しんだ。母親の要望に応え１週に１回は子どもの面倒をみた。しかしほとんどは、帰宅が遅く、母親は、父親をあてにできない人と思ったという。

［幼児期］

１歳半頃から、父親は仕事上の人間関係から不機嫌になることが多くなり、子どもにつらくあたるようになった。そのため、子どもは父親を恐れるようになった。４歳のとき妹が生まれ、母親の妹への対応を見て甘えたい気持ちが生じたが、母親に受けてもらえず、同時期から幼稚園に入園した。年中組のときには担任の先生に可愛がられたが、年長になると担任と相性が合わず、またクラスメイトに対する乱暴な行動が多くなった。

［学齢期］

小学校に入学し、１・２年の間は担任が目をかけてくれたので楽しく学校に行っていたが、３年になり、担任が代わってからクラスの中での問題行動が激しくなって現在に及んでいる。ただ、問題行動とはいっても、無意味な争い事ばかりしているわけではなく、先生や女子などに理不尽な態度をとられたときに反撃する。したがって、男子との友達関係は良く、野球、サッカーのクラブでも頑張る。

（３）相談経過

最初は子どもも来所していたが、通うのが遠いため母親のみ心理相談に来所するようになる。毎週１時間の心理相談を続け、約８ヵ月が経過している。

［父親の協力が得られない時期］

最初の２ヵ月の間に、母親は、それまでの子育て上の苦悩を語るとともに、子どもが周りの人をいらいらさせる行動は、甘えたいが素直に甘えを出せないので、人からの関わりを引き出す行動であること、相手の反応をためす行動であることを理解していった。しかし、この頃には父親の協力は得られず、母親は、父親への不満や、父親のワンマン的で厳しい態度の背景と

なっている父親の親の厳しさについて子どもに話している。子どもは、父親を嫌っていながらも、父親の価値判断を取り込んでいるところも見られる。

［父親が子育てに協力し始める時期］

その後の２ヵ月間の間に、母親に子どもの行動の意味が見えるようになってきて、少しずつ子どもの甘えを受け入れることができるようになってくる。子どもも前よりも素直に甘えを出せるように変わってくる。この頃、父親の方も仕事関係が順調にいくようになり、家で穏やかに子どもと接することも見られるようになる。また、学校への連絡帳に、「やさしい面をもっている子どもである」とポジティブな評価を記している。これを子どもは読み、うれしがる。母親は父親の協力を受け、安定した気持ちで子どもに関わることが可能になったのであるが、同時期には、両親が話し合って塾に行くことを認めるということもみられる。

［父親の役割がさらに発揮される時期］

その後２ヵ月には、父親がクラス担任と会いに行き、子どもをきちんと評価する発言をするとともに、家と学校で力を合わせて子どものために取り組もうと話してくる。また、風呂に一緒に入り話を聞いてやる、近所で誤解されることがあったときには子どもの言い分を聞いてやり、一緒にあやまりに行く、相撲をとる、といったことをするようにもなる。このような父親の態度を反映してか、子どもの荒れた言動は治まる。心の安定は、言動だけではなく文字にも表れ、きちんときれいに書けるようになる。母親も子どもの対応に余裕がもてるようになる。この母親の対応を受けて、子どもは、甘えを、さらにわかりやすい形で現わせるようになる。

この後も、子どもの状態は安定している。母親も父親の態度を評価することが増えてきており、子どもに、父親が子どものことを心配していること、子どもによいことがあったときには、父親も本心は喜んでいるのであること等を伝えることが多くなっている。

事例２

（１）概要

［主訴］

不登校を主訴とする男子。初診時小学校５年生。４年生の秋から登校できなくなる。現在中学校１年生であるが、不登校の状態は続いている。家の外に出ることはほとんどなく、相談に通ってくるときと母親と短時間の外出とに限られている。

［家族］

本人と両親の３人。父親、母親ともに４０代前半である。知人の紹介で、なんとなく結婚したということである。父親は会社員。休みの日には、一日中ごろごろとしており、子どもと遊ぶことは、現在も過去もあまりない。家の中での存在感は薄く、子どもに言わせると、いるかいないのかよくわからない存在ということである。なお父親自身は、小学校の頃に父親を亡くし、その後は年長の兄弟の家で育てられたという経歴をもっている。自分自身の親との関係は親密ではない。母親は、常に体の不調を訴え、多分に心気症気味であるが、実際に目の病気も患っており、また、けがも多い。相談の初回か

ら夫との関係が悪いといい、関係を改善しようという意識はない。さらにそれだけではなく、夫の価値を低く評価し、それを子どもにも話している。夫との関係を切り捨てている分を子どもとの関係で満たしており、母子のべったりしている共生関係は明らかである。母親は、人付き合いは苦手である。自分の母親との関係については、親離れできていないことを意識している。

（2）生育歴

［周産期］

特記事項なし。

［乳児期］

具体的な様子はあまり語られず不明。ただ、子どもの方から甘えてくるというよりも、母親の方で抱いていたということである。父親は、男の子なので喜んだものの、相手の仕方がわからなかったという。人見知り、後追いはあったようであるが、強度については不明である。

［幼児期］

子どもはブロックで一人遊びをしていることが多く、友達付き合いはなかったようである。母親も体が弱かったこともあり、子どもとはずっと一緒にいたものの、遊ぶことはなく、「危ない」と制止することが多かったという。母親は、子どもが自分でいろいろなことをしようとするときに何でも制止してきた、と幾度も話す。言葉の発達は遅く、2歳半で片言が言え、5歳ぐらいに話せるようになったということである。幼稚園ではいじめられることが多かったという。

［学齢期］

小学校に入学しても友達はできなかったようで、学校にはただ行っていただけという。

（3）相談経過

子どもと母親が相談に来所する。両者を別々の相談員が担当し、心理相談を2週に1回の割合で行なう。

［存在感のない父親］

子どもは、当初、父親がいないということと、自分を背中におんぶして力強く空を飛んでくれる父親を求める気持ちを象徴的に語る。しかし、母親の話からしても父親の子育てへの協力はほとんどなく、また家の中での父親の存在感が全くないこと、そのため、母親と子どもは、寄生関係ともとれる母子共生状態にいることが明らかになってくる。相談員の側で、相談への父親の参加を勧めるが、母親は拒否的で、参加する気持ちのある父親を相談から切り離しておこうとする態度がみられる。そうしていながら、父親に理解がないと非難し、父親の価値を下げること（脱価値化）をする。そして、子どもにも父親に力がないことを伝える。子どもも、父親の存在を余計なものとして切り離す気持ちを、象徴的に話す。さらに、相談員の方で、母親が子どもを自分の分身のように抱え込んでおきたい気持ちをとりあげると、母親はけがを負い相談を休む。子どもも、6年になって少し学校に行こうかと動きだすとけがをしてしまうということがある。けがをしてまでも、母子は、今の共生関係を持続していたいということを、暗に示す。

［父親が動き出す―しかし・・・］

それでも、父親は、中学入学前に、学校選択のことで子どもや母親と一緒に動き始める。ま

た家の中で子どもとボール投げをする。この直後、相談開始後2年近く経って、初めて父親が相談に来る。このことが力になったのか、母親と一緒でないと来れなかった子どもが、次の相談には一人で来れる。これが中学1年の5月のことである。ところが、母親は、この後で、父親の相談への参加を有意味なものにする話し合いを父親とは持たず、さらに、子どもに急に一人で行動するように要求するというように、子どもを切ろうとする態度を極端な形で表わす。これをされた子どもは不安になり、引きこもりがちになり、相談を休むことが続く。その後、子どもは、自分の人格を認めるようにと母親に言いながらも、自立するには力が弱く、家に引きこもっている状態である。相談に来所する以外は家の中に居ることが多い。

Ⅱ．考察

事例より、子どもの心理的発達を支える父親の機能として、1．母親を安定させる機能、2．母子の共生関係に介入する機能、3．子どもの同一化の対象となる機能、の3つを取り上げ考察する。

1．母親を安定させる機能

（1）母親を安定させる機能

この機能は、父親が、子育てに協力することにより、母親の不安や心身の疲労を軽減させ、母親の子どもとの安定した関わりを支える機能である。この機能は、特に子育てに手が掛かる乳児期や幼児期に必要とされるものであるが、障害児の場合には、必要とされる期間が延長される。また、乳幼児期に限らず、子どもの成長の過程で、さまざまな問題が生じたときには常に必要とされる。この機能を平成2年度に報告したアンケート調査の結果[(2)] からいうならば、母親の良き理解者や協力者としての機能ということになる。

さて事例からこの機能を検討すると、事例1では、子育てが一番大変だった乳児期に父親ができる範囲内で協力したものの、母親にとっては不十分であったということである。このことは、母親の心労を強め、子育てを楽しめない状況を作り、子どもの甘えを受けとめる余裕をなくさせることにつながっている。しかし、相談経過で述べたように、父親が子どもに関わり始めると、母親は父親の参加をポジティブに評価し、また子どもに対する母親の応対が受容的なものへと変わってくる。このところに、今論じている、母親を支える父親の機能の発現を見ることができる。この事例1に対し、事例2では、母親を支える機能は過去にもまた現在でも、見られていない。

（2）父親のこの機能が発揮される条件

事例1と2の違いは、夫婦関係の質の違いと、父親の子どもと接する能力の違いから生じているのではないかと思われる。夫婦関係と父親の子どもと付き合う能力、これが、母親を支える父親の機能を発揮させる条件であろう。事例1では、夫婦関係に不満がありながらも事例2ほど冷めていない。したがって、父親の関わりが生じると母親はそれをプラスに評価することができる。また、子どもと接する能力も、事例1の父親の方が高い。これは、おそらくは、父親自身の親子関係の質の違いを反映しているもの

と予想される。つまり、事例１の父親の男親は厳しかったものの、この父親にモデルとなれる何かを残しているのであろう。

（３）相談者の役割

父親の子どもに接する能力を高めることは比較的容易である。相談の中で、父親の子ども理解を助け、父親の関わりをポジティブに評価し、励ますことにより可能である。ここに、父親が、相談に参加することの意義がある。この点については、平成２年度の報告でも述べた通りである。

また、父親が機能するようになるまでは、相談者が、母親を支える役割を担う。母親の不安を鎮め、子ども理解を助けることを行なう。

ところで、夫婦関係を相談の過程で改善していく作業は困難を伴うものであるが、ある程度は可能である。つまり、母親を支えることをしながら、同時に母親自身のことや、父親のことを話題にし、夫婦関係を顧みることを進めていく。そして、時期をみはからって父親の相談参加を勧めるのである。

２．母子の共生関係に介入する機能

（１）母子の共生関係に介入する機能

この機能は、乳児期に形成された母親と子どもとの密着した関係を、子どもの自立の力の芽生えとともに少しずつ解いていく際に働く父親の機能を指したもので、Mahler,M.S. らの研究（1975）[3] が明らかにしたものである。父親は、母と子の共生関係に割って入り、子どもの母親からの分離に手を貸すのである。この機能は、密着的な母子関係から、母子がお互いを独立した人格をもっている一個の人間として認め合い、相互的に付き合う関係へと発達していく過程で重要とされるものである。

事例でみると、事例２が母子の密着が強く、共生関係の続いていることが明白である。父親は、母子の間に割って入り、母子関係をさらに発達した方向へと進展させることができないでいる。

（２）機能する条件

事例２の父親がこの機能を果たせないでいる背景には、母親自身、自分の母親からの親離れができていないことと、夫婦関係が冷めているために母親が親から分離した場合の依存相手を見い出せないこと、そして、父親が子どもとの関係を形成できないこと、が関係している。このことは、父親が共生関係に介入する機能を発揮できる条件として、夫婦関係、母親の親離れ、父親と子どもとの関係が重要であることを示している。

（３）相談者の役割

夫婦関係と、父親ー子ども関係の改善への支援については、考察１の（３）で述べた。残る母親の親離れへの支援は、母親と、子どもとの関係を話し合う過程を通し、重なり合うように見えてくる母親自身の親子関係を少しずつ取り扱っていく作業の中で進行する。母親が親離れをする際には夫や友人などとの関係に依存することが必要であるが、夫に依存することができない母親には、相談者は、ある意味では、依存の対象になるような気持ちで接することも考えられよう。

3．子どもの同一化の対象となる機能

（1）機能について

精神分析では、子どもの自我の形成における同一化の役割を重視している。これは、親が子どもの同一化の対象になれることの重要性をいったものである[(4)][(5)]。子どもが、このような人間になりたいと思えるような部分を親がもっていて、その材料を提供できることは、その親子にとって幸せなことである。

この点について事例を検討すると、事例1では、子どもが父親に同一化していることが認められる。つまり、理不尽さに対する批判的な目である。これは、父親がもっているものである。これと同時に、女々しさを嫌う気持ちも、父親に同一化している部分である。いうなれば、父親流の男らしさに同一化しているのである。前者の傾向は、クラスでの言動に表れ、後者の傾向は、家で母親に対する甘えの出し方に表れている。理不尽さに対する批判は、裏を返すと、正統さやわかりやすさに対する好みということもできる。したがって、正統に評価される場面、たとえば、野球やサッカーは子どもが好きな場面になる。

事例1に対し事例2では、父親に対する同一化の現象は見られない。父親は、同一化しようにも、よくわからない、影の薄い存在である。

（2）機能する条件

事例1の場合、父親の男らしい面は、子どもが父親と接しながら感じたものでもあろうが、母親が子どもに話す父親像を通して伝わった部分も多いものと思われる。ことある度に、母親は、父親の性格や父親自身の育てられ方について話している。このことがすべて良かったとはいえないが、子どもに父親像を明確にさせることには役立っている。これは、父親像が、父親と子どもとの直接的な関わりを通して直接的に子どもの心に形成されるだけでなく、母親を通して二次的に形成されるという性格をもっていることを示している。これは、父親への同一化が、母親を通してなされるということになり、父親への同一化における母親の役割の重要性を示している。このことから、父親が子どもの同一化の対象になれるための条件として、父親自身の態度が明確であり、良い面ももっていることを前提とした上で、母親が父親をポジティブに評価する気持ちをもっていて、それを子どもに伝えることができること、が挙げられる。この点からすると、事例2では、この条件を全て欠いているといえよう。

（3）相談者の役割

父親が子どもの人格形成において同一化の対象となるには、上述したように、父親が子どもと関われること、父親が、母親の育児の協力者となることや生活態度を通して母親のポジティブな評価を受けており、母親を通して子どもに父親像として伝えられる存在であることが関係している。これを支えるのが相談者の役割ということになる。父親一子ども関係の変容に向けては、考察1－（3）で述べたように、父親を支える相談者の役割が重要であろう。また、父親像を伝える母親の役割の向上については夫婦関係の改善も必要であり、この点については、考察1－（3）と考察2－（3）で述べたように、母親を支えながら夫婦関係の再構築へ向け

ての相談者の対応が考慮されることになろう。

Ⅲ．まとめ

子どもの発達における父親の機能を検討する作業を事例分析を通して行ない、父親の機能と、この機能を支える条件、そして相談者の役割について明らかにした。また、これまでに行なったアンケート調査の結果を事例検討を通すことによりさらに明確にすることを試みた。要約すると、以下の通りである。

1、父親の機能として、母親を支え安定させる機能、母子の共生関係に介入し母子関係をさらに発達させる機能、子どもにとって同一化の対象となる機能の３つを示した。

2、上記の父親の機能が発揮されるには、家族関係や父親母親それぞれの発達等に関して幾つかの条件があるように思われた。この条件として、母親を支え安定させる機能には、夫婦関係の良さと、父親の子どもとの関係を形成する能力、また、母子の共生関係に介入する機能には、母親自身の親からの自立の程度、夫婦関係の良さ、父親と子ども関係の形成、そして、同一化の対象となる機能には、父親自身が母親や子どもに暖かく接することと、父親の態度をポジティブに評価する母親、子どもに父親像を伝える母親の気持ち、をそれぞれ条件として指摘した。

3、上記の条件を考慮しながら、相談過程の中で、相談者は、母親を支え援助するだけでなく、父親を支え父親の子どもとの関係を形成する能力を高め、時には、夫婦関係の改善についても慎重で細やかな対応をしながら取り組むというように、幅の広い対応必要とされる。

参考文献

1）川井　尚他、（1990）、育児における父親の役割に関する研究、厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」（班長　平山宗宏）平成元年度研究報告書107-116。

2）吉田弘道、（1991）、小児科クリニックでの診療・相談過程における父親の役割に関する研究、厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」（班長　平山宗宏）平成２年度研究報告書187-192。

3）マーラー，M．S．他（1975）、高橋雅士他訳、乳幼児の心理的発達、黎明書房、1981。

4）ジェイコブソン、E．（1964）、伊藤洸訳自己と対象世界、岩崎学術出版社、1981。

5）ブロス、P．（1985）、児玉憲典訳、息子と父親、誠心書房、1990。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

本研究は、小児科クリニックの診療・相談過程に父親が参加することの意義および参加の役割を検討することを目的としている。これまでの2年間の研究では、診療・相談に父親が参加しやすい条件を診療側が整えることにより父親参加の頻度が高まること(1)(2)、診療・相談に継続的に通ってきている発達障害児や情緒障害児の父親のうち約3分の2は積極的に子どもにかかわり、母親の良き理解者や協力者として助け合って子育てに参加していること、診療・相談に父親も参加することにより子どもの発達に有益な展望が開けることを報告した(2)。しかし、これら積極的に子育ての役割を担っている父親がいる一方で、適切な役割を果たせないでいる父親の存在も認められた。また、このように、子育てにおいて役割を果たせない父親の背景には、現在までの夫婦関係や子育ての歴史が関与していることも示された(2)。そこで、今回は、父親が家庭の中で子どもの発達において担っている機能は何か、この機能が果たせる条件は何か、そして、相談の過程の中ではどのような心づもりで援助したらいいのかを、心理相談の事例研究を深めることにより探ってみることにした。